

# スマホ使用が幼児の言語発達に及ぼす影響

研究代表者 水野智美 筑波大学 医学医療系 准教授  
共同研究者 徳田克己 筑波大学 医学医療系 教授

## 1 はじめに

子どもは、1歳前後において目の前にある事物や起きている事象の言語表記を獲得し、その後、徐々に目の前で起きていない事象の想起が可能となり、言語に対して言語で答えられるようになってくる。幼児期のこのような言語能力の発達には、言語的および非言語的な表現を用いて、知識や感情に関するコミュニケーションを行うことが重要な役割を果たす(外山・久野・知念・佐竹, 1994)。また、言語能力の発達には語彙の習得が必要不可欠であるが、子どもが親などの身近な大人と主体的に、自発的にかかわることによって語彙が増え、結果的に言語発達が促される(内田, 1999)とされている。

しかし、最近では親子のコミュニケーションの減少が危惧される事態が起きている。それは、スマートフォン(以下、スマホ)の普及である。スマホは家庭の中だけでなく外出先でも、場所を選ばず使用可能であり、長時間子どもを飽きさせることがないことから、乳幼児を持つ保護者にとっては利用性、汎用性の高いツールである(大西・平野・佐伯, 2017)と考えられている。

また、幼児がスマホを使用することについては、コミュニケーション以外にも問題が指摘されている。ネット依存の低年齢化が社会問題化し、幼児の中でもスマホ依存を背景要因となって心療内科を受診するケースが出てきている(増田, 2019)。また、スマホの使用頻度が高くなることによって、睡眠の質が下がり、子どもがイライラしたり、攻撃的になったりする(増田・山下・松本・増田・胸元, 2019)ことが報告されている。その他にも、スマホによって子どもの姿勢が悪くなり、それによって視力に影響している(厚東・中澤・国兼, 2019; 井上, 2015)ことが明らかになっている。

以上のことから、子どもがスマホを使用することによって、物理的に親子のコミュニケーションの量が少なくなるだけでなく、子どもが主体的かつ自発的に大人と関わる機会が減少することになり、それらのことから言語発達にゆがみが生じることが懸念される。そこで、幼児期の子どもがスマホを使用することによって、言語発達にどのような影響を及ぼすのかを明らかにしたいと考えた。

## 2 電車内、空港の待合室における子どものスマホの利用状況(研究1)

### 2-1 目的

電車内および空港の待合室において、1~8歳と思われる子どもがどのようにスマホを利用しているのかを台湾、韓国と比較する。

### 2-2 手続き

#### (1) 電車での観察対象と手続き

東京(山手線、京浜東北線、計9時間)、台北(台北MRT文湖線、計6時間)、ソウル(ソウル地下鉄2号線、計5時間)において、保護者と1~8歳と推定される子どものペアを観察対象にした。二人とも座席に座っている場合と親が座席に座り、子どもがバギーに乗っていて親と対面している場合を観察した。5分以上の観察ができたケースのみを有効データとした。観察時間は5分間であり、5分間以上乗車している場合であっても観察開始から5分間のデータのみを有効とした。その結果、日本では82組、台湾では98組、韓国では42組のデータが分析対象となった。

#### (2) 空港の待合スペースでの観察対象と手続き

羽田空港(55組の親子ペア、計3時間)、那覇空港(14組の親子ペア、計2時間)、札幌空港(18組の親子ペア、2時間)において、合計87組の親子ペアを観察した。手続きは電車の方法と同様であった。

### 2-3 結果と考察

表2-1に3つの国・地域での電車の中及び日本の空港での子どもの行動を、また表2-2に親の行動を示し

た。5 分間に、複数の行動が出現した場合には重複して計数したため、観察した行動の百分率の合計は 100 を超えることになっている。

表 2-1 をみると電車内で親に話しかけていた子どもは日本が最も少ないことがわかる (32%)。しかし、表 2-2 をみると、43%の親は子どもに話しかけており、台湾 (36%) よりも多く、韓国 (50%) よりも低率であった。親が子どもと言葉遊び (なぞなぞやクイズ) をしたり、手遊びをしていた子どもは日本では皆無であった。この種の関わりは、子どもの言語の力を伸ばすことにつながるので欠かすことができない。同時に、親も勉強しておかないと、子どもを楽しませる言葉遊びや手遊びをすることはできない。つまり、親の日常の努力が必要な関わりである。それを日本の母親がまったく行っていないことは残念なことである。

一方、韓国では 12%の子どもが親と一緒に言葉遊びや手遊びをしていた。また韓国では本を読んだり、絵本を見ている子どもが 10%おり、日本や台湾よりも高率であった。これらは韓国の家庭において幼児教育が盛んにおこなわれていることと関係している。将来の受験に備えて、低年齢から少しでも知識を身につけさせたいと考えている親が、遊びの場面でも知識を身につけさせようとしているのであろう。

子どもが電車の中でスマホを最も見ていたのは日本であり (16%)、次いで韓国 (12%)、台湾 (10%) であった。ゲームをしていた子どもも日本が最も多く (9%)、次いで韓国 (7%)、台湾 (3%) であった。タブレットを含めると、電車の中で子どもがひとりで電子機器を用いて時間を過ごしていたのは日本 (26%)、韓国 (19%)、台湾 (14%) の順であった。スマホの利用内容はどの国でも YouTube とゲームであった。日本では 4 人にひとりの子どもがスマホやゲーム機を手にして黙々と動画を見たり、ゲームで遊んでいる「スマホ依存状態」であった。

表 2-2 の保護者の過ごし方をみると、スマホを使っていた親は、日本 (32%) が台湾 (39%)、韓国 (36%) よりも少なく、子どもの過ごし方とは異なる結果になった。とは言っても、どの国・地域でも 3 名にひとりの親はスマホを手に入れていることになる。観察した 5 分間、子どもにまったく興味を向けず、黙々とスマホを操作していた親も多く、その間、子どもから話しかけられても無視するか生返事をする状態であった。子どもも親も、日本では「外を見る」割合が高くなっているが、これは台湾の MRT は一部の区間が地下を走っていること、韓国ではほとんどの区間が地下を走行しており、地上に出ているのは大きな川を渡る区間だけであったことが影響している。子どもが食べ物を食べていたのは日本が最も多く (16%)、次いで韓国 (10%) であった。台湾が 0%であるのは、駅構内、プラットホーム、電車内では飲食が禁止されているからである。

日本の 3 つの空港の待合スペースでの観察では、待ち時間が長いためか、子どもは走り回ったり、散歩したりすることがあった。スマホを使っている子どもは 8%であり、電車よりも少なかったが、タブレットを使っている子ども、ゲーム機を使っている子どもがともに 8%いた。親の 3 割はスマホを使っており、子どもと話をしている親は電車に比べて少なかった。

表 2-1. 電車の中、空港待合スペースでの子どもの行動

子どもの行動	日本の電車 (n = 82)	台湾の電車 (n = 98)	韓国の電車 (n = 42)	日本の空港 (n = 87)
親に話しかける	32%	41%	40%	5%
外を眺める	32%	16%	2%	18%
スマホを使う	16%	10%	12%	8%
食べ物を食べる	16%	0	10%	10%
車内を見る	13%	8%	0	—
玩具で遊ぶ	10%	4%	17%	8%
ゲームをする	9%	3%	7%	8%
絵本を読む	6%	1%	10%	2%
タブレットを使う	1%	1%	0	8%
寝る	0	2%	2%	2%
言葉遊び、手遊び	0	2%	12%	2%
歩き回る、散歩	—	—	—	11%
空港に設置されたテレビを見る	—	—	—	8%
ドリル等の勉強をする	—	—	—	2%

表 2-2. 電車の中、空港待合スペースでの親の行動

子どもの行動	日本の電車 (n = 82)	台湾の電車 (n = 98)	韓国の電車 (n = 42)	日本の空港 (n = 87)
子どもに話しかける	43%	36%	50%	24%
スマホを使う	32%	39%	36%	30%
外を眺める	15%	4%	0	0
食べ物を食べる	6%	0%	0	7%
子どもと遊ぶ	6%	0%	7%	6%
スキンシップ	5%	0%	2%	3%
一緒にスマホ見る	4%	1%	5%	1%
寝る	2%	1%	2%	0
子どもの世話をする	2%	1%	7%	2%
ゲームをする	1%	1%	0	0
本を読む	1%	1%	5%	3%
車内を見る	1%	0	0	—
タブレットを使う	0	2%	0	0



写真 2-1. 台湾の親子  
母親が子どもの背中に文字を書いて、  
子どもがそれを答える遊びをしていた。



写真 2-2. 台湾の親子  
母親は乗車してすぐに子どもにタブレット  
を渡した。それから二人は話をするこ  
もなく、母親はスマホ、子どもはタブ  
レットを使っていた。



写真 2-3. 韓国の親子  
親子でじゃんけんをして、買った方  
がクイズを出すという遊びをしていた。



写真 2-4. 韓国の親子  
地下鉄に乗ったらすぐに、母親はスマ  
ホ、子どもは携帯電話を取り出し、ず  
っと操作していた。親子の会話はほ  
とんどなかった。

### 3 幼児期の子どもおよび保護者のスマホの利用状況（研究2）

#### 3-1 目的

幼児の保護者を対象にした質問紙調査を行い、幼児にスマホをどのように使わせているのか、スマホを子どもが使用することを保護者はどのように認識しているのか、子どものスマホの使用頻度の高さに関連する要因は何かなどを明らかにする。

#### 3-2 手続き

##### （1）調査対象者

東京都内、千葉県内、茨城県内の6つの幼稚園、保育所、認定こども園に子どもを通わせている保護者650名に質問紙を配布し、447名から回答を得た（回収率69%）。そのうち回答に不備のあるものを除き、432部を有効回答とした（有効回答率66%）。

##### （2）調査方法

それぞれの幼稚園、保育所、認定こども園の管理者に調査を依頼し、承諾を得た園の保護者に質問紙を配布し、留置法によって回収した。なお、無記名、自記式の質問紙を用いた。調査時期は、2018年7月から2019年1月であった。

##### （3）倫理的配慮

本研究は、筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：1347）。

#### 3-3 結果と考察

##### （1）対象者の属性

対象者の性別は、父親3%（14名）、母親97%（418名）であった。年齢は、20代2%（11名）、30代59%（254名）、40代以上39%（167名）であった。子どもの人数は1人18%（80名）、2人60%（257名）、3人17%（16名）、4人以上4%（18名）、無回答1%（2名）であった。

子どもが同居している家族は、母親94%（407名）、父親94%（406名）、祖母14%（61名）、祖父12%（52名）、おじ・おば2%（9名）、その他5%（21名）であった。

##### （2）対象者のスマホ使用状況

対象者がスマホ（ガラパゴス携帯を含む）を日常的にどの程度使用しているかについて、「非常によく使う」から「全く使わない」までの5段階のリッカート尺度を用いて尋ねた。その結果、平均値は4.14（SD=0.89）であり、利用頻度が高いことが確認できた。スマホの使用内容を尋ねた結果を表3-1に示した。表によると、「写真を撮る、見る」（92%）、「SNS（LINE、Twitter、Facebookなど）をする」（85%）、「ニュースを読む」（82%）、「メールをする」（69%）などであった。

子どもと食事をしている際にスマホを見ることあるか、子どもと話をしている時にスマホを見ることあるかについて、それぞれ5段階のリッカート尺度を用いて尋ねたところ、前から平均値が2.07（SD=0.98）、2.44（SD=0.97）であり、対象者はそれぞれの行動をあまりしていないと認識していた。

表3-1. 対象者はスマホで何をしているか（複数回答）

N=432

写真を撮る、見る	92%（397名）
SNSをする	85%（369名）
ニュースを読む	82%（353名）
メールをする	69%（296名）
動画を見る	53%（230名）
音楽を聴く	38%（163名）
ゲームをする	31%（135名）
その他	18%（79名）

### (3) 子どものスマホ使用状況

子ども（子どもが複数いる場合には、幼児期の子ども）がスマホ（タブレットを含む）をどの程度使用しているかについて、「非常によく使う」から「全く使わない」までの5段階のリッカート尺度で尋ねたところ、平均値は2.58（SD=1.10）であり、使用頻度はそれほど高くなかった。テレビやDVDを見る頻度を「非常によく見るから」「全く見ない」までの5件法で尋ねると、平均値が3.60（SD=1.01）であった。また、絵本を読む頻度を5段階のリッカート尺度で尋ねたところ、平均値は3.13（SD=1.04）であり、テレビやDVD、絵本ほどはスマホを使用していないことがわかった。

子どもがスマホで何をしているのかを尋ねたところ（表3-2）、「写真を撮る、見る」が最も多かった。「動画を見る」については、半数以上の子どもがしていることが確認できた。

子どもはどのような時にスマホを使用しているかを尋ねたところ（表3-3）、「家族でスマホの画像や動画、音楽を共有するとき」という回答が最も多かった。その一方で、「移動時間や待ち時間などの手持ち無沙汰なとき」「公共の場などで静かにしてほしいとき」「保護者が家事などで手が離せないとき」も多く、子どもを静かにさせるために保護者が子どもにスマホを与え、子どもだけでスマホを使用している様子が見えなかった。また、「子どもが使いたがる時」が3割あり、子ども主導でスマホを使用している状況を確認できた。

子どもがスマホを使用する際のルールについて尋ねたところ（表3-4）、7割以上の家庭で「大人の許可を得てからスマホを使用する」ことを決めており、「使用してもよい時間の長さ（1回○分まで、1日△分までなど）を決めている」「使用してもよい内容（アプリ、サイトなど）を決めている」「使ってもよい時間帯、いけない時間帯を決めている（例：食事中は使用してはいけない）」といった、使用時間、使用内容、使用時間帯のルールを設けている家庭が約4割あった。その一方で、「大人と一緒にスマホを使用するようにしている（子どもだけで使ってはいけない）」家庭は3割にとどまった。

表3-2. 子どもはスマホで何をしているか（複数回答）

N=432

写真を撮る、見る	62% (268名)
動画を見る	57% (245名)
幼児用の知育用アプリで遊ぶ （大人も使用する）ゲームをする	26% (113名)
テレビ電話をする	19% (80名)
動く絵本のサイトから絵本を読む	13% (56名)
何となく触っている	3% (11名)
その他	2% (9名)
	6% (26名)

表3-3. 子どもはどのような時にスマホを使用しているか（複数回答）

N=432

家族でスマホの画像や動画、音楽を共有するとき	40% (174名)
移動時間や待ち時間などの手持ち無沙汰なとき	34% (146名)
子どもが使いたがる時	30% (129名)
公共の場などで静かにしてほしいとき	29% (127名)
保護者が家事などで手が離せないとき	26% (113名)
ご飯の時間などで、その場に座っていてほしいとき	4% (15名)
動揺・興奮している子どもの気持ちを落ち着かせるとき	3% (13名)
その他	8% (36名)

表3-4. 子どもがスマホを使用する際のルール（複数回答）

N=432

大人の許可を得てからスマホを使用する	71% (305名)
使用してもよい時間の長さを決めている	41% (176名)
使用してもよい内容を決めている	41% (178名)
使ってもよい時間帯、いけない時間帯を決めている	37% (158名)
大人と一緒にスマホを使用するようにしている	28% (121名)
特にルールを決めていない	5% (22名)
スマホを使用した後に必ず大人に感想などを伝えるようにしている	1% (4名)
その他	2% (9名)

#### (4) 子どもがスマホを使用することに関する対象者の認識

表3-5に示したスマホを使用することに関する意見について、「非常にそう思う」から「全く思わない」までの5段階のリッカート尺度を用いて尋ねた。その結果、「幼児期から長時間にわたってスマホを使用すると、将来、スマホ依存につながる」について高く賛同を得た。ただし、「長時間にわたってスマホを使用することによって、子どもの言葉の発達が遅れる」については、それほど賛同を得られなかった。また、「スマホによって子どもが自分で調べ物を行うことができる」「スマホから様々な言葉を覚えることができる」というポジティブな面もある程度、賛同を得た。

表3-5. 子どもがスマホを使用することに関する認識

	M	SD
幼児期から長時間にわたってスマホを使用すると、将来、スマホ依存につながる	4.3	0.86
スマホを使用することによって、人との会話時間が減る	3.8	1.02
スマホによって子どもが自分で調べ物を行うことができる	3.7	0.87
スマホから様々な言葉を覚えることができる	3.5	0.99
スマホばかりをしていて、友達と遊べない子どもになる	3.3	1.07
長時間にわたってスマホを使用することによって、子どもの言葉の発達が遅れる	3.0	1.13

#### (5) 家族での会話

子どもは自分から積極的に家族に話をするかを「非常によく話す」から「全く話さない」までの5段階のリッカート尺度で尋ねたところ(5に近い方がよく話すことを示す)、平均値は3.84(SD=1.00)であった。また、子どもは家族が話している時に自分もその会話に入ろうとするかを「非常にそうする」から「全くしない」までの5段階のリッカート尺度で尋ねたところ、平均値は4.46(SD=0.78)であり、子どもは家族と積極的に会話している様子がうかがえた。

なお、子どもがスマホを使用することによって親子で会話する時間が減ったと思うかについて「非常にそう思う」から「全く思わない」までの5段階のリッカート尺度で尋ねたところ、平均値は1.91(SD=1.01)であり、スマホを使用することによって親子の会話が減ったとはあまり認識されていなかった。

#### (6) 子どもがスマホを使用する頻度と関連する要因

子どもがスマホを使用する頻度を従属変数とし、対象者のスマホ使用の状況(使用頻度、食事時のスマホ使用、子どもとの会話中のスマホ使用)、子どもがテレビやDVDを見る頻度、絵本を見る頻度、子どもがスマホを使用して行う内容、子どもがスマホを使用する状況、子どもがスマホを使用する際のルール、子どもがスマホを使用することに関する対象者の認識、家族での会話(子どもから積極的に家族に話しをするか、子どもがスマホを使用することによって親子の会話が減ったか)を説明変数として重回帰分析を行った(表3-6)。重回帰分析は、ステップワイズ法を用いた。

表より、子どもがスマホを使用して行う内容として、「ゲームをする」「動画を見る」「幼児用の知育アプリで遊ぶ」を選んだ家庭では、子どもが使用する頻度が多くなっていた。ゲーム、動画、知育アプリは使用時間を決めなければ、際限なく使い続けてしまう。前述のように、子どもがスマホを使用する内容は「写真を撮る、見る」ことが最も多かったが、これについてはスマホの使用頻度の高さにはつながらなかった。

また、「保護者が家事などで手が離せないとき」「子どもが使いたがる時」「移動時間や待ち時間などの手持ち無沙汰なとき」に使わせている家庭の方が、子どもがスマホを使用する頻度が多くなった。「家族でスマホの画像や動画、音楽を共有するとき」に使用していることとスマホの使用頻度との関連が見られなかったことを考え併せると、子どもが保護者と共にスマホを使用するのではなく、子どもにスマホを与えているだけで保護者の関与が少ない状況があると、子どものスマホの使用頻度が高くなると言える。

子どもがスマホを使用する際のルールについては、「大人の許可を得てからスマホを使用する」「大人と一緒にスマホを使用する」ようにしている家庭では、使用頻度が低くなることが確認できた。このことについても、大人がコントロールしながら子どもに使用させることによって、使用頻度が低くなると言える。一方、「使ってもよい時間帯、いけない時間帯を決めている」家庭では使用頻度が高くなった。このルールの場合に、「食事中は使用してはいけない」などの使ってはいけない時間帯だけが決められていれば、使ってもよい時間帯の幅が広がってしまう。

さらに、「長時間にわたってスマホを使用することによって、子どもの言葉の発達が遅れる」と回答者が認識している家庭では子どもの使用頻度が低くなった。この意見に対する賛同は全体的には高くなかったが (M=3.0)、このように考えている家庭では、子どもに意識的にスマホを与えず、その結果、使用頻度が低くなったのであろう。

表 3-6. 子どもがスマホを使用する頻度と関連する要因

説明変数	$\beta$
子どもがスマホを使用して行う内容：動画を見る	0.195**
子どもがスマホを使用して行う内容：(大人も使用する) ゲームをする	0.141**
子どもがスマホを使用して行う内容：幼児用の知育アプリで遊ぶ	0.121**
子どもがスマホを使用する状況：保護者が家事などで手が離せないとき	0.245**
子どもがスマホを使用する状況：子どもが使いたがる時	0.157**
子どもがスマホを使用する状況：移動時間や待ち時間などの手持ち無沙汰なとき	0.120**
子どもがスマホを使用する際のルール：使ってもよい時間帯、いけない時間帯を決めている	0.156**
子どもがスマホを使用する際のルール：大人の許可を得てからスマホを使用する	-0.134**
子どもがスマホを使用する際のルール：大人と一緒にスマホを使用する	-0.096*
子どもがスマホを使用することによって家族と会話する時間が減った	0.103*
子どもがスマホを使用することに関する対象者の認識：長時間にわたってスマホを使用することによって、子どもの言葉の発達が遅れる	-0.201**
$R^2$	0.464**

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$

## 4 言語発達検査による幼児のスマホ利用と言語発達との関連 (研究 3)

### 4-1 目的

幼児のスマホ利用の頻度が言語発達とどのように関連しているのかについて、子どもへの言語発達検査を実施して明らかにする。

### 4-2 手続き

#### (1) 調査対象者

東京都内、茨城県内の3つの幼稚園、保育所に通う年中(4歳)児クラスおよび年長(5歳)児クラスの子どものとその保護者108組のうち、子どもに対する言語発達検査を最後まで実施できなかったケース、保護者の回答に不備のあったケースを除き、102組(年中児親子49組、年長児親子53組)から回答を得た。

#### (2) 調査方法

各幼稚園、保育所を通して、研究協力者を募り、保護者から同意を得た子どもに対して言語・コミュニケーション発達スケール(LCスケール)を行い、その保護者に対して研究2で実施した保護者に対する質問紙調査を行った。調査時期は、2019年8月から2019年12月であった。なお、各幼稚園、保育所の方で、それぞれの子どもと保護者に同じ記号と数字(例えばLH1、LH2など)をつけ、それをもとにマッチングした。

子どもに実施したLCスケールは、1)感情の理解に関する課題(5問)、2)状況に合った対応を言葉で説明する課題(4問)、3)イラストによる手がかりを用いての言語理解の課題(6問)、4)語彙に関する課題(5問)、5)素話による言語理解の課題(2問)、6)言語でルールを説明する課題(3問)、7)イラストに描かれた状況と感情を理解する課題(6問)を実施した。また、LCスケールを実施する前に5分程度、ぬいぐるみや絵本を用いて一緒に遊ぶ時間を設け、調査時に子どもが過度な緊張をしないように心がけた。1人の子どもに対する実施時間は、約35~40分程度であった。

#### (3) 倫理的配慮

本研究は、筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:1347)。



写真 4-1. 言語発達検査をしている様子

### 4-3 結果と考察

学年別にみた LC スケールの各課題における平均正答数を表 4-1 に示した。表によると、「イラストによる手がかりを用いての言語理解の課題」、「素話による言語理解の課題」、「イラストに描かれた状況と感情を理解する課題」の 3 課題において学年による統計的に有意な差が認められた。

保護者が質問紙調査の中で回答した子どものスマホの使用頻度（5 段階によるリッカート尺度）と各課題の相関関係を学年別にみた結果を表 4-2 に示した。表によると、年中児のスマホの使用頻度と「素話による言語理解の課題」に負の相関が認められた（ $r=-.38$ ,  $p<0.01$ ）。つまり、スマホの使用頻度が高い子どもは、視覚的な手がかりがなく、言葉の情報だけで内容を理解することが苦手であると言える。しかし年長児にはその傾向が見られず、また年中児も年長児もその他の項目とはスマホの使用頻度と関連が認められなかった。

表 4-1. 学年別にみた LC スケールの各課題における平均正答数

	<i>M</i>		<i>SD</i>		<i>t</i> 値 ( <i>df</i> =100)
	年中	年長	年中	年長	
感情の理解に関する課題（5 問）	4.61	4.89	0.95	0.47	1.87
状況に合った対応を言葉で説明する課題（4 問）	3.10	3.42	1.07	0.93	1.59
イラストによる手がかりを用いての言語理解の課題（6 問）	4.76	5.25	1.35	0.96	2.13*
語彙に関する課題（5 問）	3.45	3.87	1.26	1.16	1.75
素話による言語理解の課題（2 問）	0.96	1.32	0.84	0.75	2.29*
言語でルールを説明する課題（3 問）	1.55	1.83	0.91	1.03	1.44
イラストに描かれた状況と感情を理解する課題（6 問）	4.16	4.64	1.26	1.02	2.11*

\*: $p<.05$

表 4-2. スマホの使用頻度と LC スケールの各課題の正答数との相関係数

	<i>r</i>	
	年中	年長
感情の理解に関する課題	-.26	-.14
状況に合った対応を言葉で説明する課題	.16	-.27
イラストによる手がかりを用いての言語理解の課題	-.01	.04
語彙に関する課題	.02	-.19
素話による言語理解の課題	-.38**	.02
言語でルールを説明する課題	-.18	-.19
イラストに描かれた状況と感情を理解する課題	.02	.06

\*\*: $p<.01$

## 5 ベテラン保育者からみた幼児のスマホ利用と言語発達との関連（研究4）

### 5-1 目的

20年以上の保育経験がある保育者は、携帯電話やスマホが存在していなかった20年ほど前の幼児と最近の幼児の言語の発達に違いがあると思うか、また家庭でのスマホの利用とどのように関連していると感じているのかを明らかにする。

### 5-2 手続き

#### （1）調査対象者

東京都内、茨城県内、千葉県内、愛知県内、沖縄県内の幼稚園、保育園、認定こども園に勤務する保育経験が20年以上である保育者25名を調査対象とした。

#### （2）調査方法

保育者を対象とした研修会にて調査協力を依頼し、協力可と回答した保育者に対して個別によるヒアリング調査を行った。ヒアリング調査は、1名につき30分～40分であった。調査時期は2019年7月～2020年2月であった。

#### （3）倫理的配慮

本研究は、筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：1347）。

### 5-3 結果と考察

20年前の幼児と比べて最近の子どもの方が全体的に理解言語（言葉を聞いて理解すること）の発達が遅いと思うかを尋ねたところ、56%（14名）がそう思うと回答し、残りの人は変わらないと思う、あるいはわからないと答えた。理解言語の発達が遅くなっていると感じている人に対して、なぜそのように感じるかを尋ねたところ、絵本の読み聞かせをしている時や言葉だけで指示をした時の子どもの理解力を挙げる人が8名いた。具体的には、「同じ絵本を用いて読み聞かせをしているにもかかわらず、今の子どもの方が絵本の内容を理解できていないように感じる」「絵本の話が長くなると、内容がわからなくなってしまふ子どもが目立つようになった」「絵本の読み聞かせをしても、すぐに飽きてしまふ子どもが増えた」「言葉だけで説明しても、何を言われているのかがわからず、間違っただけの行動をしたり、自分から尋ねてくることもなくボーっとしたままにいる子どもが以前よりも多くなった」などが挙げられた。

表出言語（言葉を発すること）の発達について違いがあると思うかを尋ねたところ、32%（8名）が最近の子どもの方が遅いと思うと回答し、残りの人は変わらないと思う、あるいはわからないと回答した。そのように感じた理由を尋ねると、「子どもから自発的に出る言葉が少ない」こと、特に「入園当初は会話に慣れていない子どもが増えたように感じた」ことを挙げていた。また、このような背景として、「家庭でのコミュニケーションが少なくなっているように思う」という意見を挙げる人が4名いた。具体的には、「以前は家庭で保護者や兄姉と会話した内容を覚えて、保育者に家族が何を話したかを紹介する子どもが多かったが、最近家族で何を話したか、どこへ行ったかという行為を伝えてくれることはあっても、家族の中の会話を伝えることが少なくなった」「以前は家族の口真似をする子どもが多かったが、最近芸人やアニメなどの真似しか出てこない」などが語られた。このことから、家族における会話の量が以前に比べて今は少なくなっている可能性があることが保育者の意見からうかがえた。

また、子どもがスマホをよく利用している状況が垣間見られるエピソードを尋ねたところ、「YouTubeなどの動画の内容を非常によく知っている」、「休日にしていたことを子どもに尋ねると『スマホを見ていた』と答える」、「家族と一緒に時間を過ごす園の行事（運動会や遠足など）の最中に子どもがスマホをしている」、「寝る前に2時間以上もスマホで動画を見ているために朝起きられずによく遅刻してくる」、「降園後や休日に子どもと会った時に子どもがスマホを手をしている姿をしばしば見る」などが挙げられた。

スマホをよく使っている子どもに言語発達の問題が見られるかを尋ねたところ、スマホをよく使っている子どもに言語発達の問題を感じるということを感じる保育者が52%（13名）いた。また、「スマホの影響なのかどうかはわからないが、スマホをよく使わせている家庭では親子共にコミュニケーションが下手な傾向がある」という意見が3名から挙がった。スマホが直接的な影響を与えているとは言い切れないが、半数以上の保育者は間接的に子どもの言語発達に何らかの影響があると感じていることがわかった。

## 6 まとめ

研究1の結果から、日本、台湾、韓国の親子のコミュニケーションを比較すると、日本は韓国や台湾よりも、電車の中での親子の関わり(話をする、言葉遊びや手遊びをする、子どもが親に抱っこされる、親に絵本を読んでもらうなど)が少なかった。つまり、日本が3つの国・地域の中で最も子どもにスマホを与えることが多く、親子のコミュニケーションの量が不足していると言える。

また、研究2より、子どもがスマホを使用して行う内容、子どもがスマホを使用する状況、子どもがスマホを使用する際のルールが、子どものスマホの使用頻度と関連していることを確認できた。

研究3からは、スマホの使用頻度と子どもの言語発達と関連する項目が少なかったが、年中児においてスマホをよく使用している子どもは言葉を聞いただけで内容を理解することが苦手であった。つまり、年齢の小さい子どもがスマホという視覚的な情報に頼る生活をし過ぎていると、目の前にない事象を言葉でやり取りする能力が育たない危険性があると言える。ただし、その他の項目でスマホの使用頻度と言語発達検査の結果に直接的に関連性が見られなかったが、その理由として、子どもの言語の発達はスマホの使用だけでなく、家庭での会話、保育の場における活動や会話、友人関係などの様々な影響を受けることにある。また、本研究では、保護者が主観的に5段階で子どものスマホの使用頻度を判定して回答しており、実際の使用時間を反映していない可能性があることが考えられる。

なお、研究4のベテラン保育者からは、子どもの言語発達とスマホの使用には間接的な影響があることが示唆された。

以上の結果から、スマホの長時間の使用によって子どもの言語発達に大きなゆがみが生じるという明確な結果は得られなかったが、スマホを極端に使用することは子どもの発達に何らかの影響があることを示唆する結果は得られており、今後も幼児にスマホを長時間使用させることに対する警鐘を鳴らしていく必要があると言えよう。ただし、スマホが普及している現在において、子どもが一切、スマホを使用しないようにすることは現実的にむずかしい。子どもにスマホをどのように与えるのかを各家庭でしっかりと決めておく必要がある。

このことは、テレビやDVDを子どもにどう与えるかについてのルールに似ている。テレビやDVDは、子どもに見せる内容を選び、見せる時間を限定し、見せた後にその内容について子どもと大人が共有することによって、子どもの発達を促進するものとなる(徳田・水野, 2009)。具体的には、番組内容としては子どもが理解できる言葉で語られた幼児向けのコンテンツを選ぶこと、1回の視聴時間が5歳児であっても15分以内であること、視聴した内容をもとに親子がコミュニケーションをすることが必要であることが示された。このルールに沿って、適切な映像を子どもに見せることによって、子どもはその映像から多くの言葉や情報を得たり、社会性を身につけたり、様々な音楽や映像にふれて感性を磨くことができる(徳田・水野・西館・松下, 2010)。

スマホを使用することによって子どもの発達が促進されるのかどうかについては、まだ議論が残るところであるが、スマホの過度の使用は子どもには適切ではない。

本調査の結果から、子どもにスマホを使わせることについて、保護者が以下のことを意識しておかなければならないと言える。

- ・「動画」「ゲーム」「知育アプリ」を使用する場合には、あらかじめ使用する時間を決めておく
- ・保護者の手が離せないとき、移動時間や待ち時間などの手持ち無沙汰なときに、すぐに子どもにスマホを与えるのではなく、スマホ以外に子どもが時間を過ごせる方法を考える
- ・子どもが使いたがる時にいつでも自由に使わせてはいけない
- ・大人の許可を得てから使うというルールを作り、大人の管理下で使用させる
- ・子ども一人でスマホを使用するのではなく、大人と一緒に楽しむようにする

## 【参考文献】

樋口進(2017)スマホゲーム依存症, 内外出版社.

MIZUNO T., & TOKUDA K. (2016) Increase in the Percentage of Pedestrians Using Smartphones while Walking since the Release of "Pokemon Go": How they are causing safety concerns to vulnerable pedestrians. The 17th Asian Society of Disable Sociology, 29-32

MIZUNO T., TOKUDA K., & CHO H. (2016) The Current Situation of "Using a Smartphone while Doing Something Else" and Related Factors. Journal of Digital Convergence, 14(12), 561-569.

MIZUNO T., NISHIMURA M., & TOKUDA K. (2016) Current Situation of Using Their Smartphones While Walking in the Major Stations and its Surrounding Area in Tokyo and Osaka. -Focused on the result of on-site calibration research-. The Asian Journal of Disable Sociology, 15, 1-10

NISHIMURA M., & TOKUDA K. (2017) How Guardians Take Care of Their Children in a Train. The 9th Asian Society of Child Care. 81-83.

徳田克己・水野智美(2011)お母さんがうなずいた数だけ子どもは伸びる, PHP

TOKUDA K., & MIZUNO T. (2017) The Situation of Increased Number of People Using Smartphone for Pokemon Go While Walking in Taiwan. The 18th Asian Society of Disable Sociology. 49-52.

井上文夫・金子敏雄・高安和典・佐々木潔・中島彰子・早川一行(2015)高校生の立位姿勢と情報機器使用との関連, 京都教育大学紀要, 126, 155-166.

厚東芳樹・中澤翔・国兼慶(2019)小学生における立位姿勢と穂数との関係—2年生の場合—, 人間生活文化研究, 29, 257-262.

外山浩美・久野雅樹・知念洋美・佐竹恒夫(1994)質問—応答関係検査 1—検査の作成とノーマルデータ—, 音声言語医学, 35, 338-348.

増田彰則(2019)低年齢化するねつと・ゲーム・スマホ依存と睡眠障害, 増田彰則編著 危機にある子育て環境—子どもの睡眠と低年齢化するゲーム・スマホ依存—, 南日本新聞社.

増田彰則・山下協子・松本宏明・増田敬祐・胸元孝夫(2019)低年齢化する子どものネット・ゲーム依存と睡眠障害, 子どもの心とからだ, 27(4), 473-47.

大西竜太・平野美千代・佐伯和子(2017)3歳児の養育における統制場面でのスマートフォン使用に関する母親の認識, 日本公衆衛生看護学誌, 6(3), 240-248.

徳田克己・水野智美(2009)親を惑わす専門家の言葉, 中央公論新社.

徳田克己・水野智美・西館有沙・松下信武(2010)幼児向けディズニー番組の知育教材としての有効性—3つの番組に対する幼児関係の専門家による評価, Journal of East Asian Studies, 1, 1-15.

内田伸子(1999)発達心理学—言葉の獲得と教育—, 岩波書店.

内田伸子(2018)学力格差は幼児期から始まるか?—保育と子育ては子どもの貧困を超えるカギになる—, 江戸川大学こどもコミュニケーション研究紀要, 1(1), 1-8.

### 〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
幼児のスマホ利用と言語発達の関係 (1) —幼児のスマホ利用の状況—	日本教育心理学会第 61 回総会	2019 年 9 月
Appropriate Usage of Smartphone by Infants -Frequency of Smartphone Usage and its Relevant Factors-	The Asian Journal of Child Care, 10, (in press)	(印刷中)